

詩歌を追ふて



文藝欄

つきてはみふとも思へり。
眞ひる日をなくヒカリシにたへ
がたくねむりな思ふ灰色の路
懐める私はこんなに歌はなければ
ならなかつた。そうして京阪沿線
きはみふとも思へり。
昨日今日雙る旅路の一節り命の
葉の落ちたハエモーラの梢に
まつわりつて風が
ヒステリカルにすゝ泣く
冬の夜さもなれば
私の胸に甦つてくる
一ぱの涙さなつて甦つて来る
あの女の面貌よ……

は堀田氏の夜の泣き笑ひを、
に興味深く拜見なほ氏の土の香り
深い小品や短篇をいつもつま
んでゐます、いつも民謡につ
か、岸氏の作品の見れないもの、
論じ批判しておられる堀田氏
は最初、雨情異い作品がある
と思つてゐたら心解しておられ
ないであります、いつも民謡につ
か、岸氏の作品の見れないもの、
あの雲に風に心をふるはせる
らばれの鳥が天を野を戀るよ
香いの作品の見れないのが寂
しい色の瞳……

水　　非常　　香の　　面影の道、少し物足りないが年々
かし　　私が　　走る　　時代も流ひ起しました。齊藤洋輔は、
いて　　私なこ　　走る　　あの頃の中になほ人生を思はば
い　　な　　が、　　ものがいそんであると思ひます。
　　の　　が、　　以上感じたまゝに、これまでアーチ
　　で　　が、　　ルと日本の感情、風土、生活が、
　　す　　が、　　化の温體。そこには我々民衆が、
　　う　　が、　　が新しく思ひます。でさうかと思ひます。
　　う　　が、　　漫識を顧みずの失言を許して、ハーバード
　　う　　が、　　だいて私は皆様の指導に依つて先生の一步一歩を進んで行きました。
　　う　　が、　　生の一步一歩を進んで行きました。
　　う　　が、　　想ひます。失禮多謝

「ほらッ！ あたしの言つ
り三番でさう」
「スマセン！」
「それな質ひそこれたセリフ
ルサの中であづかつたき
紙幣を押へながら言ひまく
そ、わや、勝馬こばね
だのに、決勝點へ入つたの
一つで他の番號でした。
「すみません！」
今度はサリーが首をうな
じた。
「いいよ～」
セリゴが、大ようにもう
結局、損はありませんでく
うけもありません。セリ
は、なかなか現実されそ
ません。

「あなたは『小夜ぐれ』
を歌つたものと解してゐる
事は私ども承知下さい。
心に思ふまゝの少女心、
女の心が詠つたものな、

An illustration of a woman in traditional Japanese clothing, possibly a geisha or maiko, holding a small object in her hands. She is looking down at it. The background is plain.

This block contains the right portion of the advertisement for Norddeutscher Lloyd. It features a large, stylized eye graphic with a thick black outline and a dark iris. To the left of the eye, there is Japanese text: "ピリーナ" (Pirina) at the top, followed by "絶対に副作用を伴はぬ信用薬剤なり" (An absolute medicine with no side effects), "クに御注意あれ" (Please pay attention to this), and "リューマチス及び婦人の病" (Rheumatism and women's diseases). To the right of the eye, the word "Dr. Moac" is written vertically above the word "専門" (Specialist). Below these elements, the company name "Norddeutscher Lloyd" is repeated in Japanese characters.

ヨード三
ヨードヤ
ヨード六
ヨード八
ヨード九

母の探偵 (一)
母の探偵 (二)
母の探偵 (三)
母の探偵 (四)
母の探偵 (五)
母の探偵 (六)
母の探偵 (七)
母の探偵 (八)
母の探偵 (九)
母の探偵 (十)
母の探偵 (十一)
母の探偵 (十二)
母の探偵 (十三)
母の探偵 (十四)
母の探偵 (十五)
母の探偵 (十六)
母の探偵 (十七)
母の探偵 (十八)
母の探偵 (十九)
母の探偵 (二十)
母の探偵 (二十一)
母の探偵 (二十二)
母の探偵 (二十三)
母の探偵 (二十四)
母の探偵 (二十五)
母の探偵 (二十六)
母の探偵 (二十七)
母の探偵 (二十八)
母の探偵 (二十九)
母の探偵 (三十)
母の探偵 (三十一)
母の探偵 (三十二)
母の探偵 (三十三)
母の探偵 (三十四)
母の探偵 (三十五)
母の探偵 (三十六)
母の探偵 (三十七)
母の探偵 (三十八)
母の探偵 (三十九)
母の探偵 (四十)
母の探偵 (四十一)
母の探偵 (四十二)
母の探偵 (四十三)
母の探偵 (四十四)
母の探偵 (四十五)
母の探偵 (四十六)
母の探偵 (四十七)
母の探偵 (四十八)
母の探偵 (四十九)
母の探偵 (五十)
母の探偵 (五十一)
母の探偵 (五十二)
母の探偵 (五十三)
母の探偵 (五十四)
母の探偵 (五十五)
母の探偵 (五十六)
母の探偵 (五十七)
母の探偵 (五十八)
母の探偵 (五十九)
母の探偵 (六十)
母の探偵 (六十)



【五十三】

(樂上演) 中村彦兵衛
(松村彦秀書)



金髮魔

探偵小説

洋吉、如何に好む職業につく事
な、私がさまたげなかつたといつ
からこそ、探偵なんかに前が
つた事は、まさか父様が御歸
朝になつても、御賛成はなさるま
いよ……だがもう命令まで受けた
以上、どうする事も出来ないから
せめては咲子さんを一日も半日も
早く、警察からすみ出す手段
を考へてくれ

洋吉は、豫て約した相手の、谷
村を失つてからは、もう自分一人
の努力によつて、この事件の解決
をはからねばならなかつたので、
母にも疎々話はせずに、直にわが
行機にて新馬たま

機行飛

行機にて新馬たま

行機にて新馬たま